

The Women's Studies Association of Japan

学会ニュース

日本女性学会
第155号 2022年5月

発行 日本女性学会
事務局 〒272-0023
千葉県市川市南八幡1-16-24
FAX 047-370-5051
E-mail toiwase@joseigakkai-jp.org
ウェブサイト
http://joseigakkai-jp.org/
頒価 一部300円

目次

2022年度日本女性学会大会プログラム 1	情報提供のお願い （『女性学』J-STAGE掲載に関して）... 8
2022年度日本女性学会大会 シンポジウム趣旨説明・発題者から..... 3	総会案内..... 9
個人研究発表・パネル報告・ ワークショップ..... 3	会員の著書紹介..... 10
	会員の著書紹介募集のお知らせ..... 10
	会費納入のお願い..... 10
幹事会議事要録..... 7	会員情報（別紙）

2022年度日本女性学会大会

日程：6月18日（土）、19日（日）

形式：Zoomによるオンライン開催

* 大会への参加方法：大会専用ポータルサイトから参加登録を行い、参加費を指定口座に振込まれた方に、参加者専用ページへのパスワードをお送りします。期限までに、参加登録と参加費振り込みを、お願いいたします。シンポジウム・総会・分科会へのアクセスの詳細は、参加者専用ページに掲載いたします。当日は、参加者専用ページから、入室していただきます。

* 参加申し込み期間：5月1日（土）～6月3日（金）

* 参加費支払い期限：6月3日（金）

* ポータルサイトのURL：<https://wsajonline2022.jimdofree.com/>

参加費：会員500円／非会員（常勤）1,000円／非会員（常勤以外の方）500円

プログラム

第1日 6月18日（土）

13:00～16:30 シンポジウム

16:40～17:40 総会

第2日 6月19日（日）

9:30～12:00 個人研究発表、ワークショップ、パネル報告

13:00～15:30 個人研究発表、ワークショップ

日本女性学会 2022 年度大会シンポジウム

6月18日(土) 13:00～16:30

ジェンダー化された表象とフェミニズム

パネリスト (五十音順)

吉良知子 (近代日本美術史・ジェンダー史) 日本女子大学学術研究員。東洋英和女学院大学ほか非常勤。アジア・太平洋戦争期を中心とした近代女性アーティストおよび人形作家、現代メディアにおける表象などを研究。著書『戦争と女性画家 もうひとつの「近代」美術』(ブリュッケ、2013年)、『女性画家たちの戦争』(平凡社、2015年)、論文『『女流美術家奉公隊』と《大東亜戦皇国婦女皆働之図》について』『美術史』(美術史学会、2002年10月)、「ハワイ・アリゾナ記念碑における日本の表象とジェンダー」『ジェンダー史学』(ジェンダー史学会、2017年12月)「近代日本における女性と人形制作——上村露子とその活動の再解釈」『人形玩具研究 かたち・あそび』(日本人形玩具学会、2018年3月)など。連載コラム「炎上考」(『東京新聞』夕刊隔週掲載、2021年1月～12月)ほか。

田中東子 (メディア・スタディーズ、カルチュラル・スタディーズ) 東京大学大学院情報学環教授。第三波以降のフェミニズム、ポピュラー文化とジェンダー、メディア技術とフェミニズムなどを研究。著書『メディア文化とジェンダーの政治学——第三波フェミニズムの視点から』(世界思想社、2012年)、編著『出来事から学ぶカルチュラル・スタディーズ』(共編著、ナカニシヤ出版、2017年)、『私たちの「戦う姫、働く少女」』(共著、堀之内出版、2019年)、『ガールズ・メディア・スタディーズ』(編者、北樹出版、2021年)、翻訳に『ユニオンジャックに黒はない——人種と国民をめぐる文化政治』(ポール・ギルロイ著、共訳、月曜社、2017年)ほか多数。

前之園和喜 (社会学・ジェンダー研究) 民間調査会社。一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了。メディアにおける性暴力、批判的男性性研究など。著書『性暴力をめぐる語りは何をもたらすのか——被害者非難と加害者の他者化』(勁草書房、2022年)、論文「アンケートで性別をどのように聞けばいいか」『日本世論調査協会報 よろん』129号(日本世論調査協会、2022年)、共著『ジェンダーについて大学生が真剣に考えてみた——あなたがあなたらしくいられるための29問』(佐藤文香監修・一橋大学社会学部 佐藤文香ゼミ生一同、明石書店、2019年)など。

コーディネーター

古久保さくら (社会学・女性学) 大阪公立大学人権問題研究センター教員。高等教育における人権教育について実践・研究。論文「運動と研究の架橋——世代の架橋としての教育の可能性」(『架橋するフェミニズム歴史・性・暴力』牟田和恵編、松香堂書店、2018年)、「キャンパス・ハラスメントの対応防止体制をめぐる——考察——A大学2016年調査からみえてくるもの」(『人権問題研究』19号、2022年、大阪市立大学人権問題研究センター)ほか。

荒木菜穂 (社会学・女性学) 大学等非常勤講師。フェミニズム的活動の実践について研究。論文「日本の草の根フェミニズムにおける『平場の組織論』と女性間の差異の調整」(『架橋するフェミニズム歴史・性・暴力』牟田和恵編、松香堂書店、2018年)、「『機動警察パトレイバー』と働く女性の未来」(『巨大ロボットの社会学：戦後日本が生んだ想像力のゆくえ』池田太臣・木村至聖・小島伸之編、法律文化社、2019年)「モザイク模様のフェミニズム～わたしとあなたの適度なシスターフッド」(『やわらかいフェミニズム』(仮題)河野貴代美編著、三一書房、2022年予定)ほか。

シンポジウム趣旨説明

ジェンダー化された表象とフェミニズム

古久保さくら、荒木菜穂（コーディネーター）

実在・非実在にかかわらず、表象としての「女性」がポスターや動画等に用いられることは常態化していますが、それが「フェミニスト」からのクレームによって炎上することも珍しくありません。その一方、抗議に対して、「表現の自由」という観点からの激しいバッシングが生じることもありがちです。歴史的にも繰り返されてきたこのような対立状況の中、2022年度の日本女性学会大会のシンポジウムは「ジェンダー化された表象とフェミニズム」というテーマで開催します。女性たちはどのように表象されてきたのか、ジェンダー化されたその表象に対しどのような批判的解釈をしようのか、歴史的に確認した上で現在の論争的な事例について考えてみたいと思います。フェミニズムはなぜそれらを批判し問題化してきたのか、そこでの議論からは何が見落とされてきたのか、こうした検討をふまえた上で、ジェンダー平等社会にふさわしい新しい表象や解釈を生み出す可能

性についても考えてみたいと思います。

パネリストには吉良智子さん、田中東子さん、前之園和喜さんをお迎えし、コーディネーターを荒木菜穂会員と古久保さくら会員が務めます。吉良智子さんには、女性の表象がどのように扱われてきたのか、ご自身の歴史研究の成果もふまえて、メディア研究における表象の意味づけ、批判的視点の理論的枠組みなどを中心に語っていただければと思います。田中東子さんには、従来の女性表象に対する第二波フェミニズム的な女性運動の批判にどのような課題があったのか、それを乗り越えたところで展開されつつある女性表象の可能性についても語っていただければと思います。前之園和喜さんには、若い世代の「萌えキャラファン」として、現状でのフェミニストからの批判について思うことを、具体的に、より説得的にお話しいただければと思っています。お三方を迎えてのシンポジウムを通して、女性表象をめぐる世代を超えた「知」の創造ができることを期待しています。

シンポジウム発題者から

「ジェンダー化された表象」を読解する——ジェンダー美術史の視点から

吉良智子

近年主にオンライン上で起こるいわゆる「炎上」と呼ばれる現象は、ジェンダーと表象に関連したケースが多い。だが対象となる表現物に対してどのような見解を持つにしても、それを視覚表象分析からいかに捉えることができるのか、あるいはそれは社会に対してどのような接点や作用を持ちうるのかという視点はあまり意識されていないのではないだろうか。それこそがジェンダー化された表象をめぐる、フェミニズムと反フェミニズム間のかみ合わない議論や、両者のどちらにも参入しない多くのオーディエンスの存在を考える重要なポイントに見える。

そこでまず、表象を解釈・分析することの意味や意義を、美術史研究およびメディア研究の成果に基づいて確認する。次に「ジェンダー化された表象」をジェンダー美術史の方法論を援用し、その表象の何がコンフリクトの焦点になっているのかを明らかにする。さらに1990年代後半の美術史・美術批評において、ジェンダー／フェミニズムの視点からの展覧会や研究に対して激しい批判が繰り返された「ジェンダー論争」と今日のジェンダー

化された表象をめぐるコンフリクトとの共通点を探る。

最後に表象をめぐるそこに関わる作り手、注文主、受け手、そしてそれらを包括する社会との緊張関係の見取り図を示し、膠着化した議論を少しでも前進させるための足掛かりをつけたい。

メディアと女性の表象——具体的事例からメディア文化理論まで

田中東子

本報告では、昨今SNS上で論争的になっている、メディアコンテンツや広告におけるある種の女性表現について、いくつかの具体的事例を扱いつつデジタル化時代のメディア理論やメディア文化論の観点から、以下の4点について説明を試みる。第一に、シンポジウムの開催の意図と先行する発表を受けて、「メディアと女性の表象」というテーマの大まかな見取り図を示しつつ論点を整理してみる。第二に、女性表象に対する第二波フェミニズムによる運動の成果を踏まえ、従来型メディアにおけるステレオタイプ表象や女性を表現する言葉遣いの改善、ジェンダー平等なコンテンツ作りに向けた内部考査の徹底化などが見られたことを確認すると同時に、その限界について考える。第三に、ポピュラー文化領域で

の女性自身による自由な性表現（レディースコミックスなど）、男性性のモノ的消費（BL、女性の二次創作の過激化、男性アイドル受容など）、女による女の消費（百合作品）の文化領域が拡大し、「萌え絵」への批判があたかもダブルスタンダードのように見えてしまうという点を検討する。第四に、その後のメディア技術の変化およびアナログ媒体からデジタル媒体への変容によって、様々なコミュニティの境界線が消滅し、私的領域と公的領域のシームレス化といったメディア環境の刷新が起こったことを理論的に説明すると同時に、「女性の表象」をめぐる対話の困難さとそれを超える可能性について検討してみたい。

「美少女キャラ」炎上を再考する

前之園和喜

本報告では、「美少女キャラ」、一般には「萌えキャラ」と呼ばれる、女性を描いたイラストを広告・広報に利用したことが問題とされた炎上事案をめぐる議論を整理し、その問題点と可能性を議論する。

主に「美少女キャラ」を批判する議論を参照しながら、「問題」とみなされて批判される要素を3つの軸から整理する。その3軸とは、第1に、胸などの部位を過剰に

強調するなどの「性的な見た目であるか否か」の軸、第2に、キャラクターの役回りやコラボ元の作品の物語がジェンダー規範を再生産しているなど、見た目以外で「キャラや物語などに問題があるか否か」の軸、第3に、その広告・広報で用いられる女性が単なるアイキャッチャーではなく、「女性であることの意味や必然性があるか否か」の軸である。個々の事例を参照することで、炎上する「美少女キャラ」はこの3軸のいずれか、もしくはすべてで問題となる要素をともなっていることを確認する。

「美少女キャラ」が創造され、描かれるさい、それがフィクションであるという性質から、必要以上に「女性の性的部位」や「女性らしさ」が強調される危険がある。しかし、すべての「美少女キャラ」がそのような問題を持っているわけではない。実際、「美少女キャラ」が用いられる広告・広報でも炎上しない事例が存在することは事実である。その事例は、先の3軸のいずれにおいても「問題」を抱えていないことを分析する。

炎上しない「美少女キャラ」があるとはいえ、それが「女性の表象」である点でまったく問題がないわけではないという大前提を念頭に置きつつ、「美少女キャラ」固有の問題そして可能性を探りたい。

個人研究発表・パネル報告・ワークショップ

6月19日（日） 9：30～12：00

【第1分科会 個人発表1】

司会：合場敬子

「女の職場」と「女の仕事」——美容産業従事者女性は「女性職」としての自らの職場・仕事をどう解釈するのか

永山理穂

本報告は、美容産業従事者女性へのインタビューデータをもとに、彼女たちが「女性職」としての自らの職場・仕事をどのように解釈しているのかを示すものである。彼女たちは、女性が多い職場でこそ男女平等が実現できると語り、「女の職場」に付与されるネガティブなステレオタイプを否定していた。また、女性特有の感覚や経験を活かせることから、美容産業での仕事を「女性向き」として解釈していた。そのいっぽうで、管理職などのトップの地位に就き、独立して稼ぐのは男性であるという解釈が見られた。

ジェンダーの観点から美の不均衡を考える

石川茉耶

本発表は、何を美しいとみなすのかに関する美の理論にまつわるジェンダーの問題点を、美学の観点から明らかにすることを目的とする。これまで美に関する説明は、男女関係なく全ての人にとって中立的な概念であると考えられてきた。本発表では、こうした理論がいかに権力を含む男性中心的な構造であるかを、例えば芸術作品（女性のヌード作品）に対する特定の鑑賞態度を要求することなどをもとに見ていき、中立という幻想のもと構築された美的理論を批判する。

もう一つの沈黙——性暴力被害者支援において作動する表象＝代理の暴力性に着目して

井上 瞳

近年、PTSDやトラウマの普及に伴い、性暴力被害者支援の領域では、沈黙を破ることを評価する動きが広がっている。しかし、当事者が直面するのは「言葉を持たない、語らない」といった字義通りの沈黙だけではない。本報告では、精神医療化を通じ専門化しつつある支援被支援の非対称関係に着目し、当事者が語っているにも関わらず支援者が聞き届けられない、当事者が語っていな

いにも関わらず支援者が代わりに語るといった表象＝代理の作用として課され生成するもう一つの沈黙について考察する。

「接待」と「国際交流」—— 招聘業界における「興行」の言説編成の考察

大野聖良

本報告では、日本社会において在留資格「興行」がどのような問題として形成・議論されてきたのかを、招聘業界の言説に焦点をあて考察する。まず在留資格「興行」に携わるアクターを概観したうえで、招聘業界・法務省入国管理局（当時）・政治家等の間で展開された在留資格「興行」の適正化の議論をたどり、招聘業界において外国籍者による「興行」が人種化・ジェンダー化された就労として言説化されてきた点、また在留資格「興行」はその合法性と経済をめぐる、「日本人」「男性」たちの闘う場であった点を示す。

【第2分科会 パネル報告】

政策・ジェンダー・世代・NPOの視点で見つめる女性の活動—— 社会へ届く活動を目指して (VOL. 7)

司会：渋谷典子

デートDV 110番—— 自然言語解析を援用した取り組み

長安めぐみ

認定NPO法人エンパワメントかながわでは、チャットによるデートDVの相談を2020年度から開始した。デートDVは若者の3人に1人が加害や被害に遭っているとも言われており、大変身近な問題である。当該団体では、「命の危険度」を相談員がそのつど査定しているがその信憑性について、自然言語解析を援用し解析を行なった。今回はNPOの地道な取り組みを科学的な論拠を持って社会に届ける活動として報告する。

キャリア教育とジェンダー—— 若者対象キャリアデザイン講座「みらいカフェ」からみえること

近藤佳美

浜松市の男女共同参画推進拠点あいホールでは、2017年よりワーク・ライフ・バランスの推進と女性の就業継続を目的とした若者対象のキャリアデザイン講座「みらいカフェ」を実施している。本報告では講座から見えてきた若者のキャリア選択におけるジェンダー規範の影響やジェンダー視点のキャリアデザインの可能性について考察する。

ジェンダーの内的抑制に着目したエンパワメントについて—— キャリア支援の実践から

藤井しのぶ

遅々として進まないジェンダー平等の大きな要因である性別役割意識。これからの生き方を考える女性たちの中には、性別役割意識の内的抑制の度合いによって「自らの意思による主体的な自己決定」に影響を及ぼしている例は多い。女性が本来の力を発揮するために支援者はどう寄り添えばよいのか、姿勢や具体的な方策について、実践を通じて報告する。併せて、女性のキャリア支援におけるジェンダー視点の重要性についても検討したい。

公共サービスにおける「エッセンシャル・ワーカー」へのヒアリング調査分析

中村奈津子

参画プラネットは2021年度に、公共サービスにおけるエッセンシャルワーカーのコロナ禍における現状と課題に着目した助成金事業を実施した。事業の一環として実施した6名へのヒアリングから見えてきた課題をジェンダー視点で整理し、公務の民間化や「女性活躍推進」の動きのもと不可視化されている課題も明らかとなった。今回は本事業の成果と課題を報告し、持続可能な社会へ向けた対話の機会を模索したい。

【第3分科会 ワークショップ1】

面会交流ヒアリング調査の中間報告—— 必要な支援・法制度のあり方を考える

司会：高田恭子

報告者：高田恭子、松村歌子

コメント：山崎新

現在、離婚後の親子法制度のあり方が議論されている。面会交流はそのメインテーマの一つであるが、離婚後の父母や、別居親と子どもの実態を無視して検討されているように思われる。本WSの企画グループでは、その実態を明らかにしようと、社会調査を計画し実施してきた。本WSでは、別居後5年以上経過している同居親（母）を対象に実施した11件のヒアリング調査の中間報告を行い、その報告に基づいて、今後明らかにしたい事項や法制度のあり方について議論を行いたい。

6月19日(日) 13:00~15:30

【第4分科会 個人発表2】

司会：伊田久美子

フェミニズム文学批評の変遷——時代と共に変化する読みの視点

真野孝子

世界的なパンデミック下で人々の生き方や考え方に大きな変化が現れてきている。フェミニズム文学批評も例外ではない。エッセンシャル・ワーカーのケアの重要性が再認識され、フェミニズム文学批評の言説にもケアの視点が出てきた。例えば、ヴァージニア・ウルフの『灯台へ』のラムジー夫人は「家庭の天使」を体現している人物であるが、以前は女性の自我の確立の視点から否定的に捉えられていた。しかし、ケアの視点から肯定的に読み解かれる批評が現れた。作品を具体的に読みながら変化する視点を明らかにしていくと、フェミニズム文学批評の変遷が浮き彫りになるのではないか。

中国における同性愛主体の浮上の歴史——1910年代以降の大衆メディアを中心に

于寧

本報告は中国における同性愛主体の浮上の歴史を考証する。蔡明発 (Chua Beng Huat) と岩渕功一が提唱した「アジア間相互参照 (inter-Asian referencing)」の比較図式を援用し、日本における大正時代以降の雑誌や新聞の投稿での男性同性愛者の登場に関する前川直哉らの研究を参照枠に、中国で「同性愛」概念が導入された1910年代以降の大衆メディアにおける同性愛主体の出現、いわゆる「近代的なアイデンティティ」の出現のプロセスに迫り、同性間の親密な関係に対する認識の変遷を明らかにする。

ネパール・旧王都パタンの女性自助組織のネットワークによるコミュニティの災害レジリエンス向上に関する一考察

竹内愛

ネパールのパタンでは、1990年代以後次々と設立されている女性自助組織が地域ニーズに合わせた活動を行って地域に貢献している。2015年地震発生後、女性自助組織は観光を目指した復興を計画し、リーダーシップを発揮した。新型コロナパンデミック後は、住民にマスク配布、フードバンク立ち上げ、SNSを使った情報共有など、住民の生活を安定させるために努力している。女性自助組織の長期の活動経験が、災害レジリエンス向

上にも役立っている。

米国の産児調節をめぐる規制法と医師例外規定をめぐる論争について

横山美和

米国の産児調節運動は、マーガレット・サンガーらが日本から輸入した避妊具の没収にかかわる裁判判決により1936年に大きな転機を迎えたとされる。産児調節運動家らは、各々の立場で避妊具や避妊情報の郵送や取引を禁じる法改正を目指していたが、サンガーは医師のみ例外的にそれらを許可すべきという方針であった。裁判資料から、米国の産児調節運動で「医師限定派」の優勢が形作られていった様子を明らかにする。

【第5分科会 ワークショップ2】

公共サービスとその支え手のこれからを考える

司会：瀬山紀子

報告・ファシリテーター：瀬山紀子、渋谷典子

あちこちで、当たり前のように、低賃金で、不安定な労働が広がっている。公共サービスを支える「公務非正規」の領域もその一つだ。そして、働き手に一定の“やりがい”があり、使命感を持って職にあたっている人も少なくないのが、「公務非正規」の領域だとも言える。ただ、不安定で低賃金の職では、未来が描けない。ワークショップでは、こうした現状を確認し合うと同時に、では、私たちはこの先に何を求めるのかを参加者同士で話し合っていきたい。

【第6分科会 ワークショップ3】

大学におけるジェンダー教育の困難とより良い実践を考える

司会：柳原恵

報告：茶園敏美他

教員と受講生の双方向性を重視するアクティブラーニングが推奨される中、大学教育におけるジェンダー論系の科目では、受講生からのヘイトコメント（性差別的悪意を含むコメント、教員の人格や研究分野に対する根拠に基づかない誹謗中傷を含むコメント）が教員の精神的な負担となっている。本ワークショップでは、ジェンダー論教育の現場において直面する困難を共有した上で、より良い教育法や教育実践について議論したい。また、教育現場で孤立奮闘している教員たちの緩やかな連帯の場作りを目指したい。

学会誌『女性学』 J-STAGE 掲載可否未確認論文・記事

学会ニュース第 154 号（2022 年 2 月刊）に報告の通り、日本女性学会では学会誌『女性学』創刊号から直近第 28 号に掲載された論文・記事のうち許諾が得られたものを電子化し J-STAGE にて公開しました。

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/wsj/-char/ja>

一方、以下の 36 論文・記事については、執筆者、故人についてはご遺族・関係者の掲載可否の意向確認ができず、公開できないままとなっています。

これら論文・記事の執筆者・関係者への連絡について手がかりをお持ちの方がおられましたら、下記担当宛お知らせくださいますようお願いいたします。提供頂いた情報は、学会誌『女性学』掲載論文・記事の J-STAGE 公開可否についてご意向を確認することのみに使用させていただき、それ以外の目的には使用しません。

担当・情報提供先：日本女性学会事務局（J-STAGE 掲載担当）

メール toiawase@joseigakkai-jp.org

FAX 047-370-5051

J-STAGE 公開可否未確認論文・記事

発行年 巻	執筆者	論文・記事題名
2016年 Vol. 24	舘 かおる	追悼・リブ魂の中国女性学研究者——秋山洋子さんを偲ぶ
2014年 Vol. 22	西澤 哲	特集：子ども虐待の社会・心理的背景
2012年 Vol. 20	屈雅君	研究会報告：現代中国における三種の女性話 語（テキスト） 福島俊子 秋山洋子訳
2012年 Vol. 20	後藤 優子	書評：『女が国家を裏切るときー女学生、一葉、吉屋信子』
2009年 Vol. 17	井上 恵子（共著）	特別企画分科会報告：女性の貧困と労働
2009年 Vol. 17	深江 誠子	特別企画分科会報告：フェミニズムから考える環境危機
2007年 Vol. 15	田中 玲	特集：クィアと「優先順位」の問題
2004年 Vol. 12	田中 美津	特集基調講演：自縛のフェミニズムを抜け出して——立派になるより幸せになりたい——
2002年 Vol. 10	櫛本 崇恵	投稿論文：変容する“Self”（自己）とハイブリッドアイデンティティ——グローバル時代における日本人留学女性の経験
2001年 Vol. 9	町田 美千代（逝去）	小特集：女性学よ、おまえもか！ シンポジウム会場から女性学の可能性を考える
2001年 Vol. 9	深澤 純子	小特集：アカデミズムの外側で
2001年 Vol. 9	藤田 ひろみ	研究ノート：中島みゆき 夜会『金環蝕』 フェミニズム的試論
2001年 Vol. 9	小野坂 順子	書 評：Marilyn Jacoby Boxer. When Women Ask the Question: Creating Women's Studies in America. マリリン・ジェイコビー・ボクサー『女たちが問かけるとき——アメリカ女性学の創造（仮題）』アメリカ女性学三十年の歴史との将来
2000年 Vol. 8	奥村 ゆかり	投稿論文：英国におけるブラック・フェミニズムの現在 「ブラック」という概念をめぐる議論から見えてくるもの

発行年 巻	執筆者	論文・記事題名
2000年 Vol. 8	二見 れい子	特集：支援関係づくりのプロセスにこだわる 女性学を新たな抑圧の道具としないために
2000年 Vol. 8	田川 建三	特集：表現という暴力
1998年 Vol. 6	舘 かおる	特集：学校におけるジェンダー・フリー教育と女性学
1998年 Vol. 6	森本 エリ子	特集：ジェンダーを再生産する文学教材 自我形成期の子どもたちが読み取るもの
1998年 Vol. 6	湯川 純幸	自由論題 論文：ことばとジェンダーと権力の関わりに迫る言語とジェンダー研究の到達点
1998年 Vol. 6	小林 利子	情報：パレスチナにおける女性団体の現状
1998年 Vol. 6	北田 幸恵	書評：渡辺みえこ 『女のいない死の楽園 供犠の身体・三島由紀夫』（パンドラ 1997年）
1997年 Vol. 5	二見 れい子	自由論題 論文：自分癒しと真のシスターフッドを求めて サバイバーによる自助グループ活動を通しての発見
1997年 Vol. 5	田中 明子	自由論題 論文：女性と自己愛 クリステヴァの一次ナルシシズム論にみる癒しからの成長（P.190～P.206）
1997年 Vol. 4	鄭 好善	特集：韓国における「女性とメディア研究」の動向
1997年 Vol. 4	堀田 碧	自由論題 論文：多様なフェミニズムとアイデンティティの自己決定 日本人女性が「見える」ものになるために
1995年 Vol. 3	中田 千鶴子	特集：婚外子差別を必要とする戸籍・家制度
1995年 Vol. 3	舘 かおる	特集：婚姻家族と家父長制
1995年 Vol. 3	大橋 照枝	研究ノート：エコフェミニズム概観
1992年 創刊号	今井 泰子（逝去）	論文：＜主婦＞の誕生 主婦概念の変遷 日本の場合
1992年 創刊号	福井 浅子	情報：日米文化のかけ橋 二人のフェミニスト・マネージャー
1992年 創刊号	藤枝 滯子（逝去）	学会十二年目に寄せて：学会創立のころ
1992年 創刊号	駒尺 喜美（逝去）	学会十二年目に寄せて：日本女性学会発足の頃の思い出
1992年 創刊号	松原 純子	学会十二年目に寄せて：性差の哲学
1992年 創刊号	しま・ようこ（逝去）	学会十二年目に寄せて：視点から方法へ 日本女性学会の研究動向を振り返る
1992年 創刊号	深澤 純子	書評：「この胸の嵐——英国ブラック女性アーティストは語る」 萩原弘子著（現代企画室 1990年）
1992年 創刊号	國信 潤子（逝去）	書評：21世紀「不安の時代」の地球とフェミニズム アメリカのフェミニズム誌レビュー 「Ms.」（1991年10月） 「SIGNS」（1990年秋号）

総 会

6月18日（土）16：40～17：40（オンライン）

*議案は当日配布します。会員のみなさま、ふるってご出席ください。

会員の著書紹介

- ◆富永貴公『分かちあう経験・守りあう尊厳——ラスキン・カレッジの一九七〇年代における労働者教育』春風社、2022年
- ◆風間孝、山口佐和子『教養としてのジェンダーと平和Ⅱ』法律文化社、2022年
- ◆渋谷典子（分担執筆）『NWEAC 実践研究 第12号〈ウイズコロナ・ポストコロナ時代のジェンダー平等〉』国立女性教育会館、2022年
- ◆宮津多美子『人種・ジェンダーからみるアメリカ史——丘の上の超大国の500年』明石書店、2022年

会員の著書紹介募集

以下のルールで会員のみなさまの著作を紹介します。掲載ご希望の方は、ニュースレター担当者までご連絡ください。

- ・会員が執筆・編集・翻訳している単行本（分担執筆含む、雑誌をのぞく）
- ・1年以内の発行物
- ・ご本人の申し出があったもの
- ・寄贈は条件としない
- ・寄贈いただいたもので会員の著作と判明したもの

ニュースレター担当 牟田和恵

会費納入のお願い

- 2021年度の会費が未納の方は、どうぞお早めにお支払いください。会費納入のお願いと払込用紙はすでに送付しております。払込用紙をなくされた方は、郵便局備え付けの払込用紙をご利用のうえ、下記の納入先までお振込みください。

ゆうちょ銀行 振替口座

口座記号番号 00890-6-31306

加入者名 日本女性学会

- ネットバンキングでも納入できます。

ゆうちょ銀行 支店名：089（ゼロハチキユウ） 預金種目：当座 口座番号：0031306

- 日本女性学会の会費は年収スライド制（自己申告・税込み・該当年度予定収入）をとっております。

・400万円未満（無職・学生含む）：6,000円

・400～600万円未満：8,000円

・600万円以上：10,000円

- 3年以上会費を滞納されている方は退会とみなされます（日本女性学会幹事改選選挙実施規定第4条（3））。複数年滞納されている方は、過不足なくお支払いいただくためにもご自身の納入状況を事務局にご確認のうえ、どうか早急にお支払いください。

- 学会の運営は会員のみなさんの会費によって成り立っております。重ねてのご協力をお願いいたします。

- 永年会員制度をご活用ください

2021年度から永年会員制度が開始されました。前年度までの会費を納めている65歳以上の会員は、前年度会費額の3ヵ年分の納入によって会費完納とし、永年会員とすることができます。振り込み時に「永年会費」とお書きください。

65歳以上の会員の皆さま、どうぞご活用ください。

- 学会の運営は会員のみなさんの会費によって成り立っております。重ねてのご協力をお願いいたします。